

京鹿子

昭和二十三年九月二日創刊
平成十七年五月一日創刊
通巻九六九号（五月一旬）四光社

5月号

「白壽」特集

春彼岸
丸山佳子

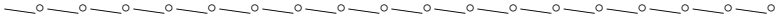
春一番が残して行つたガードマン

竹林で耳そばだてる入彼岸

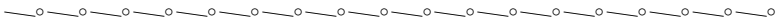
彼岸桜は仏のぬくみ嵯峨御流

つながれし犬が見てゐる鳥雲に





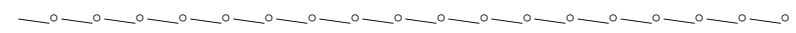
翼張つて自力本願彼岸鳶
カーブミラーの一本あしも杉花粉
初つばめ監視カメラに事なかれ
爪のよく伸びる三月雨もまた
この裕神にも仏にも好かれ
春惜しむ世間知らずの岩にかけ



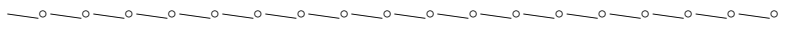
清響集
豊田都峰
その四十九



春霖のひぐれしきりに遠おもひ
越ゆるなどとてものことと野に遊ぶ
風と手を雲と手を組み野に遊ぶ
芦芽ぐみ神となりしより日はひとつ
芦芽ぐむ三上に雲の立ちゐたり
芽ぐませる波に護岸のなにげなさ



風 対 野 末 対 種 播
鳥 帰 る あ か ね の 湖 を 残 し お き
芽 柳 の な び き の 方 と 座 を 決 め む
は く れ ん は 雲 ひ と つ な き 宴 か な
春 風 へ ま た も し て ゐ る 数 合 せ
風 柳 弁 天 さ ん の 赤 き 堀
弁 天 へ ざ わ つ い て ゐ る 花 の 芽 々
春 光 や さ ら に 便 り の 二 つ 三 つ



秀華採集

海鳴りを耳朵に海豹廻りづめ

境 良一

より大きな水槽を作ってもそれは人間の勝手。動物にとっては狭く、広々とした海を恋う。そんな動物の思いを作者は具体的に描いている。対象への思い入れが作品を深める。

鈴鳴らし金柑ほどの願ひごと

坂本 敏子

南座の切符むらさき春隣

森 洋子

前句の願いの量の具体的表現、後句の色と季語との響き合いを評価する。

鈴鹿 仁

十石舟

水温む十石舟の風あそび
鷹鳩に化して浄土の石の黙
蝌蚪生るははの匂ひの母の里
こんな日の蛙の誘ふ畦の道
この世には人語のぬくみ遠蛙
水ごころ得し春の鯉腹白し
春の鯉のらり動かす母郷あり

近 詠

宇都宮滴水

蛇の衣

乱気流声を盗まる初ひばり
山焼きて落人村の烟けむりとす
蝌蚪の水雲の濁りは赦さるる
浮かび来てなほも濡れけり余花の鯉
接木してけじめの付きし影となる
つぎはぎの風もて余す観潮船
蛇の衣記憶の底をくつがへす

神麓集



滑車のみ遺る一の井寒の木瓜
このしろを焼きて嫁かせず石路の絮
鷹神のむかしがもどる鏡割
焚火爆ぜ密寺の比丘尼愚痴こぼす

角 直指

きさらぎの星の心の動き初む
牡蠣啍り低血圧の身を危惧す
春の立つ大地の好きな影法師
退院のタイミング合ふ床の梅
銀鱗の釣果が魚籠に春くらむ

彌寝 瓶史

三島忌を口には出さず紅葉狩
三島の忌けんらんとして紅葉照る
赤もいろいろかへで樹林を俯瞰せり
存分にもみぢ見尽し濃き茶飲む
草もみぢ茫々として河細る

丹生をだまき

主宰受賞祝賀会
にこやかに受く花束より春あふる
花束に埋もれ佳子師春と化する
春灯に礼装の和服はみな美人
春装のめだつ着流し京男
春花抱き退くや師弟の背の柔し

山田 をがたま

寒晴の空の痛さよ印鑑押す
幸せは気付かずに居る寒卵
来し方も行方も不安椿落つ
春寒し一本足の鷺立ちて
水仙の香り残して消燈す

船越 美喜

春きざす逢ふ目印は百葉箱
過去は過去晩年に買ふ木彫雛
落してもよいなどと言ひ古手袋
今日も亦あしたを待てり春の雪
無住寺や昔の梅がほろと咲く

百葉箱 大塚 まや

神麓集



一連の行事終へたる山臈尾
庭の杉花粉は吐かず陽に媚べり
修二会終ふ憩ふ間も無し吹雪来と
涅槃西風父祖の没年早や越えし
早々と小粉^{こでまり}団の枝の芽吹き初む

奥村 鷹尾

白無垢の鴨追ふ鴨の播磨越え
ヒロシマの牡蠣が美味しい建国日
油断すな今寿の友は風邪の神
北山に狐みかけぬ狐坂
すめらぎのめらめら寒中女帝論

荻野 千枝

席入りに一枝が馳走白椿
影うつる遠望堤陽炎ひて
吉田句碑神靈寂に陽炎へる
陽炎は遠目堤の足うばふ
天望む青雲の志と芦の角

岩崎 憲二

暁暗の杜に破魔矢の鈴が鳴る
屋根の雪怒々と落ち込む露天風呂
庄内米育むべしや雪一重
龍の玉路次奥深き勝手口
梅開く袱紗包を目の高さ

高木 智

抽斗の奥の秘めごと春の雪
春雪や喪の水引が見つからぬ
春雪や矢印へひと消えてゆく
曖昧なことばこぼして春の雪
春雪へダルメシアンを走らせる

春 雪 柴田 朱美

霜柱金剛山は遠透ける
雪嶺の見える車窓の響増す
葬列に知人少なく春浅し
芽樹越しに見える他郷は煙いろ
息あらく芽樹の森から吐き出さる

松本 鷹根



京鹿子集

豊田都峰選

京都 境 良一

都路を北向く疏水に寒の鮠
海鳴りを耳朶に海豹廻りづめ
凍て冬を好きとならねば生きられぬ
臘梅やメールに言へぬこと託す
冴え返る萎縮海馬の失語症
明けまして死んだ人から年賀状
鈴鳴らし金柑ほどの願ひごと
お分けしたい手持の時間飾り昆布
息少し抜いて三日の銀の匙
眼鏡拭いても一月が見えにくい
南座の切符むらさき春隣

大津 森 洋子

東京 坂本 敏子

うたかたの生まれ四温の水となる
春時雨濡れつつ百度踏みにけり
春の雪積みゆく夜の百度石
側室の碑は塀の外春の雪
鶴を折る指に野の雪よみがへり
牡蠣を焼く枝を刃物にする漢
もうすこし駈ければ天の風となる
また戦さ二月の光ゲの姫鏡台
伏線は寒牡丹なり道曲る
早春の風の骨格見えます
鳥声も人声もして梅ふぶむ

千葉 伊藤 希眸

佐々木紗知